

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第306回

ルネ・デカルト

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和4年5月9日

編集委員：入試広報室 鈴木



ルネ・デカルトは、フランス生まれの哲学者、数学者。合理主義哲学の祖であり、近世哲学の祖として知られる。

今回の言葉

An optimist may see a light
where there is none, but why
must the pessimist always
run to blow it out?

楽観主義者は何も無いところに明かりを

見るが、なぜ悲観主義者はいつだって

その明かりを吹き消そうとするのだろうか？

Column

楽観主義者という呼び方をすると、楽道家と同じ意味で捉えられて“のんきな考え”のように感じてしまいがちですが、哲学上では『最善説』と訳され、苦悪などがこの世に存在するにも関わらず、この世界は全体的に見て存在し得る世界の中で最も良いとする考え方である (Wikipediaより引用)とあります。実際は全く違う意味なのですね。話の流れ、言い回し、意図などを含めて“聞き取る”というよりも“読み取る”という方が正しいとさえ思う日本語は、本当に複雑で難しいですね。そんな日本語を操り、同じように様々なことに思いを巡らせている日本人は非常に真面目で勤勉だと言われています。そういう意味では日本人には楽観主義者は少ないのかもしれませんが、しかし、日本人の国民性とも言える“堅実さ”によって、誰もが見落とすような場所に灯っている明かりを見つけられたり、簡単には吹き消されないような明かりを灯すことができたり、その明かりを絶やさないように守っていく優しさを持ち合わせた人がきっと大勢いると信じています。

私の中では、今回の言葉を通じてデカルトは悲観主義者を否定したいということではないと考えています。悲観主義者からすれば、なぜ楽観主義者は根拠のないことに希望を感じられるのだという意見なわけで、自分の中の考えと真逆の考えがあるからこそ自分の信じる考え方に自信も疑いも持つことができるのです。自分だけのものさしで物事を全て判断するのではなく、真逆の考えを認め、相手の立場に立って物事を考えることで見えるものが変わってくるということを伝えたかったのではないかと思います。様々な環境によって学び、様々な考え方をを持った人々が集まって社会は構成されています。互いを理解し、尊重しあって進んでいくことが大切ですね。